

### 第3問

次の文章は、『今昔物語集』の一節である。京で暮らす男が、ある夜、知人の家を訪れた帰りに鬼の行列を見つけ、橋の下に隠れたものの、鬼に気づかれて恐れおののく場面から始まる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

男、「今は限りなりけり」と思ひてある程に、一人の鬼、走り来たりて、男をひかへてゐて上げぬ。鬼どもの言はく、「この男、重き咎あるべき者にもあらず。許してよ」と言ひて、鬼、四五人ばかりして男に唾を吐きかけつつ皆過ぎぬ。

その後、男、殺されずなりぬることを喜びて、心地違ひ頭痛けれども、**(ア)**念じて、「とく家に行きて、ありつる様をも妻に語らむ」と思ひて、急ぎ行きて家に入りたるに、妻も子も皆、男を見れども物も言ひかけず。また、男、物言ひかくれども、妻子、答へもせず。しかれば、男、「あさまし」と思ひて近く寄りたれども、傍らに人あれども思はず。その時に、男、心得るやう、「早う、鬼ども**a**の我に唾を吐きかけつるによりて、我が身の隠れにけるにこそありけれ」と思ふに、**A**悲しきこと限りなし。我は人見ること元のごとし。また、人の言ふことをも障りなく聞く。人は我が形をも見ず、声をも聞かず。しかれば、人の置きたる物を取りて食へども、人これを知らず。かやうにて夜も明けぬれば、妻子は、我を、「夜前、人に殺されにけるなんめり」と言ひて、嘆き合ひたること限りなし。

さて、日ごろを経るに、せむ方なし。しかれば、男、六角堂に参り籠もりて、「観音、我を助け給へ。年ごろ頼みをかけ奉りて参り候ひつる験には、元のごとく我が身を顕し給へ」と祈念して、籠もりたる人の食ふ物や金鼓の米などを取り食ひてあれども、傍らなる人、知ることなし。かくて二七日ばかりにもなりぬるに、夜寝たるに、暁方の夢に、御帳の辺、尊げなる僧出でて、男**b**の傍らに立ちて、告げてのたまはく、「汝、すみやかに、朝ここより罷り出でむに、初めて会へらむ者の言はむことに従ふべし」と。かく見る程に夢覚めぬ。

夜明けぬれば、罷り出づるに、門のもとに牛飼の童のいと恐ろしげなる、大きな牛を引きて会ひたり。男を見て言はく、「いざ、かの主、我が供に」と。男、これを聞くに、「我が身は顕れにけり」と思ふに、うれしくて、**B**喜びながら夢を頼み

て童の供に行くに、西ざまに十町ばかり行きて、大きな棟門(注6)あり。門閉ぢて開かねば、牛飼、牛をば門に結びて、扉(注6)の迫

を、童、「ただ入れ」とて男eの手を取りて引き入るれば、男もともに入りぬ。見れば、家の内大きにて、人、極めて多かり。

童、男を具して板敷(注7)に上りて、内へただ入りに入るに、(ウ)いかにと言ふ人あへてなし。はるかに奥の方に入りて見れば、

姫君、病に悩み煩ひて臥ふしたり。跡・枕(注8)に女房たち居並みみなてこれをあつかふ。童、そこに男をゐて行きて、小さき槌つちを取らせ

て、この煩ふ姫君の傍らに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。その時に、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし。しかれば、

父母、「この病、今は限りなんめり」と言ひて泣き合ひたり。見れば、誦經ずきやうを行ひ、また、やむごとなき験者(注9)を請まねじに遣はすめり。しばしばかりありて、験者来たり。病者の傍らに近く居て、心經(注10)を読みて祈るに、この男、尊きこと限りなし。身の毛い

よたちて、そぞろ寒きやうにおぼゆ。

しかる間、この牛飼の童、この僧をうち見るままに、ただ逃げに逃げて外ほかざまに去りぬ。僧は不動(注11)の火界くわいの呪まじひを読み、病者を加持する時に、男の着る物に火付きぬ。ただ焼けに焼くれば、男、声を上げて叫ぶ。しかれば、男、真頭まあたまになりぬ。その時に、家の人、姫君の父母より始めて女房ども見れば、いといやしげなる男、病者の傍らに居たり。あさましくて、まづ男を捕へて引き出だしつ。「こはいかなることぞ」と問へば、男、事のあり様をありのままに初めより語る。人皆これを聞きて、「希けう有うなり」と思ふ。しかる間、男、頭れぬれば、病者、搔かきのこふやうに癒えぬ。しかれば、一家、喜び合へること限りなし。

その時に、験者の言はく、「この男、咎あるべき者にもあらず。六角堂の観音(注12)の利益りやくを蒙かうれる者なり。しかれば、すみやかに許さるべし」と言ひければ、追ひ逃がしてけり。しかれば、男、家に行きて、C事のあり様を語りければ、妻、「あさまし」と思ひながら喜びけり。

かの牛飼は神の眷属(注12)にてなむありける。人の語らひによりてこの姫君に憑つきて悩ましけるなりけり。(注13)

(注)

- 1 六角堂——京にある、観音信仰で有名な寺。
- 2 金鼓の米——寺に寄付された米。
- 3 二七日——十四日間。
- 4 御帳——観音像の周りに垂らしてある布。
- 5 牛飼の童——牛車ぎうしゃの牛を引いたり、その牛の世話をしたりする者。「童」とあるが、必ずしも子どもとは限らない。
- 6 棟門——門の一種。身分の高い人の屋敷に設けられることが多い。
- 7 板敷き——建物の外側にある板張りの場所。
- 8 跡・枕——姫君の足元と枕元。
- 9 験者——加持祈禱かじきとうを行う僧。
- 10 心経——『般若心経』はんにやしんぎょうという經典のこと。
- 11 不動の火界の呪——不動明王の力によって災厄をはらう呪文。
- 12 眷属——従者。
- 13 人の語らひ——誰かの頼み。

問2 波線部 a ~ e の「の」を、意味・用法によって三つに分けると、どのようになるか。その組合せとして最も適当なものを、次の① ~ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- |   |       |   |       |   |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|
| ① | ( a   | と | ( b e | と | ( c d |
| ② | ( a b | と | ( c d | と | ( e   |
| ③ | ( a   | と | ( b c | と | ( d e |
| ④ | ( a d | と | ( b e | と | ( c   |
| ⑤ | ( a   | と | ( b d | と | ( c e |

a  
鬼修飾語どもの 我被修飾語に 唾被修飾語を 吐被修飾語きかけ被修飾語(動詞)つるにより

主格を示す。**すが**

b  
男修飾語の 傍被修飾語ら(名詞)に立ちて、

連体修飾語を示す。**の**

c  
牛飼修飾語の 童修飾語の い連体形と 恐連体形ろしげ連体形なる(童)、

同格を示す。**ので**

d  
扉修飾語の 迫修飾語の 人連体形通連体形るべくも な連体形き(扉の迫)より

同格を示す。**ので**

e  
男修飾語の 手被修飾語(名詞)を取連体形りて 引連体形き入連体形るれば、

連体修飾語を示す。**の**